

佛教と平和

増 永 靈 鳳

佛教は（無我緣起中道等）教理の必然的歸結として、平和を最も愛好する宗教である。マールブルヒのハイラー教授はかつて、「佛教の教理は争いを有せず、常に平和を賞し、未だ會て彼の名によつて異教徒を迫害したことはない」といい、

ロンドン佛教會のハンフリーズ氏も、「佛教は平和の宗教といわれる。その故は未だ會て佛教戦争を起したことがなく、また如何なる時代の何人も、その信仰のために、またはその信仰を發表したために、佛教々國から迫害を受けたことがないからである」と述べている。佛教にはイスラームのように、コーランか劍かという殺伐さもなく、十字軍のような宗教戦争もない。勿論イスラームの教理そのものが好戰的ではないが、開祖宣教時代のアラビヤ人は侵略的であつたから、傳道には商略と戦略とが常に随伴していたことは否定し得ないであらう。キリスト教は神の愛を説く平和な宗教である。しかし、百年に餘る十字軍は聖地を保護し、奪還するため、信仰の熱烈さを示すものとはいへ、平和愛好の宗教としては一

つの汚點ではなからうか。「神は愛なり」といわれるが、ユダヤ教の殘滓が時折顔を出して、ねたみの神となるようである。異教徒に對しては全く冷淡な神、そねみの神となり易いといわれる。

近世には知信の論争があり、ガリレオやコペルニクスの如く、犠牲となつた科學者も少くない。また「汝の敵を愛し、汝らを責むるものために祈れ」というマタイ傳の教えはそのまゝに正しい。けれども、同じキリスト教徒の間にさえ、今まで幾度か戦争が繰り返えされた。第一次世界戦争のとき、同じ宗教を信じながら、敵見方に別れて、「神よ、我に勝利を與えたまえ」と塹壕の中で祈つた。如何に全知全能の神とはいへ、敵味方を同時に勝たすことはできないであらう。戦後キリスト教の信仰が動搖したのも故なきにあらずである。慈悲忍辱を教え、怨親平等を説く佛教は平和を最も愛好する。法句經にも、「げに怨は怨をもてやむことのあるべしや、怨を捨てて怨まざる怨は遂に消ゆるべし。これ千古の眞

理なり。(Na hi vereva rerāni sammantīha kudācanam, averena ca sammanti, esa dhammo sanātano)とある。佛教思想の振興は必ずや、世界に兵戈無用なる平和の樂土をもたらすであろう。大無量壽經下卷に「佛の遊履するところ、國邑丘聚化を蒙らざるはなし。天下和順に日月清明風雨時を以てし、災厲起らず、國豊かに民安く、兵戈用うることなく、徳を崇び、仁を興し、務めて禮讓を修す」といつてゐる文はまさに泰平を萬世に開く大本を道破しているといふべきである。宗教を根柢としない平和論は全く無意味である。米國で發表された第二次世界大戰で犠牲者の數は總計千七百五萬一千人以上に達している。我々は恩讐の念を超えて、心からこれらの尊い命を捨てた人々の冥福を祈らずにはおられない。一九四八年七月ハバート大學教授ゴードン・オールポルト氏以下八人の社會科學者が戰爭を惹き起す緊張の原因に關して行つた聲明、並びに一九四九年一月日本の科學者によつて、これを考究した結果發表された聲明に従えば、次の如きことがその主なものである。

「戰爭は決して不可避なものではあり得ない。戰爭を防止し、平和の基礎を定め得る可能性は人間の手中にある。しかし、平和は單なる現狀維持によつては獲得されない。生産力の向上及び資源の利用に計畫と整調とを施して、最大限の社會主義を實現すべきである。また戰爭を誘發し易い傳統が國

家主義者によつて利用されてはならない。人種の優劣は科學的には立證されない。従つて、福祉の享受は平等である。また通信交通の完全な自由と一切檢閲の撤廢とが必須である。自由は外的強制からの獨立であるとともに、自己自身の本心に従ふことである。かくして、言論に居住に、信教に、參政に基本的自由が獲得される。自由は獨裁的干渉や封建的陋習に反對し、敢然として立つ自覺的行爲である」と。

ユネスコ憲章の前文に「戰爭は心の中に起るものであるから、平和も心の中で打ち建てられねばならない」とある。外部の機構や組織は勿論必須であるが、それにも増してこれらの運動の基本には、何といつても、宗教的な深い信念がなければならぬ。M・R・A運動の如きも、その根柢には、キリスト教の絶対愛 (absolute love) 絶対の正直 (absolute honesty) 絶対の無私 (a unselfishness) 絶対の純潔 (a purity) があり、いづれも宗教的心情に基いてゐる。

國際關係が正義と人道との人類普遍の原理に代つて、權力政治によつて支配されるならば、世界平和はいつも脅かされる。力の觀念を基底とした世界觀の歸結はいつも戰爭である。力は二物の拮抗を意味する。それ故、今後は科學政治經濟の根柢より力の觀念すなわち對立觀念を抜き去つて、世界の平和、人類の福祉に寄與する一如觀や中道觀を導入しなければならぬ。かかる宗教思想によつて、はじめて道徳に生

命を考え、人類に希望を與え、政治に理想を與え、世界に平和を將來し得るであろう。こうした宗教こそ、私は佛教ではないかと思う。何となれば、

(1) 佛教が無知の無明 (avidyā) を否定し、先入的獨斷を脱却し、正智によつて世界人生の理法を獲得しようとする態度や方法は頗る科學的であり、しかも佛教は科學を包容して、正しい方向に指導し、(2) 佛教が私欲我執を否定し、相互の依存關係を強調し、報恩感謝と精進努力とを力説することは宗教の本領を發揮するものであり、しかも無我と緣起の思想は國家我を否定して國際間の協力を促進するものであり、(3) 個人原理たる自由と社會原理である平等とは相互に矛盾するが、無我たることによつて、その矛盾が解除され、しかも佛教は各個人の内奥に佛たるの本質すなわち佛性の悉有を認め、相互の人格を尊重すべき根據を與えて、個人や國家の自己絶對化を斥け、和を尊ぶ教團の構造はアジアのデモクラシーの根源をなし、(4) 自他・物心・怨親その他すべての矛盾對立を否定して、不二法門を強調し、「力は正義なり」(Might is Right) という誤れる見解を是正し、あらゆる面から二物對抗の觀念すなわち鬭争を抜き去つて、國際的相互扶助の平和な協同生活を力説し、(5) 上は正法を求め、下は一切を救濟するという菩薩の大誓願に生き、利他に於て自利を全うし、世俗を超えて世俗を生かす無礙の活動すなわち無住處涅槃 (aprā-

tiṣṭhita-nirvāna) の大乘精神を徹底せんとする限り、佛教こそ眞に平和の宗教たるの名に價し、(6) 釋尊はバラ門の觀念哲學に満足せず、また六師外道の唯物論的見解に飽き足らずして、一多融攝の緣起的世界觀を創唱した。佛陀は前の二系統がいずれも抽象的一面に墮していることを深く省察して、社會は互いに相い依り相い助け、持ちつ持たれつ、生かし生かされて有機的に全體關係を全うすべきことを力説した。これすなわち中道の緣起の立場である。(7) アシヨカ王の利他的精神や、聖德太子の和の精神は何れもモリス教授のいわゆる「彌勒への道」(Maitreyan Way) であつて、慈愛に満ち平和を將來する未來の理想像を示すものに外ならない。

そして、佛教が現下の國際的危機を突破し、世界平和を將來するには、(1) 世界の佛教徒が強力に結合し、その平和主義を提唱し(世界佛教徒連盟の活躍に期待する)(2) 國際連合、ユネスコ、世界連邦政府、M・R・A・クエーカー(Quaker)等の平和運動に協力し、進んでこれらの會合に参加して意見を開陳し、(3) インド政府の聲明に耳傾け、そのアヒンサー運動に協力し、(ネール印度首相、ジャヤワルドネ、セーロン前經濟大臣、ラダクリシュナン、インド大統領パール判事等と提携する)(4) 核兵器の使用に敢然反對し、原子力の平和産業への轉換(ノーモア・ヒロシマ運動を擴大強化する)(5) ファッシズムやコムニズムの暴力主義を排除し、

(國の内外にわたり、暴力否定運動を強力に推進する)、(6)キリスト教やイスラームと協力して平和運動を促進し(宗教的寛容の精神を堅持し、宗教的平和運動の世界連盟を提唱する)(7)東洋の諸民族を平和的に結合する精神的原動力となり、(中共との貿易再開を促進し、彼我佛教徒の精神的結合を提唱する)(8)戦争犠牲者を救うべき社會施設を作らしめ、その精神的支柱となる(佛教者の社會的進出を一段と促進する)ことなどが要請されるであらう。

今後世界の佛教徒は強力に結束すべき必要に迫られている。宜しく内部的紛争などを速かに拂拭し、進んで封建的陋習を打破し、その高邁な理想と純一な熱情をもつて世界に平和的協力を提唱すべきである。日本の佛教徒は從來の消極的怯懦性を一擲して、内部機構の革新に着手し、海外に俊秀を送つて、最も平和愛好の宗教すなわち佛教の本領を發揮せしむべきである。

ラダクリシュナン印度大統領はかつて、「今日のような状態下において、若し世界を改善しようとするならば、先ず最初になされねばならないことは、人間の改造である。そして、人間改造のためには、佛陀の残した教ほどすぐれたものはない。若しも、世界各國の政府や、個人が佛陀の教に従つて智慧(wisdom)と慈悲(compassion)とを以て働くならば、よりよき世界の出現することは疑いなきことである」と述べ

ている。宇宙時代においても重要なことは人間の改造である。それこそ、宇宙的宗教(cosmic religion)のめずすところである。宇宙的宗教は擬人的な神觀念を超え、ドグマや神學をもたない。そして、自然界や思想界をも含めて、全存在を有意義な一つの統一體として體驗するところから起る宗教感を基底とする。それは科學を容れつつ、その方向を是正し得る宗教である。ネール首相はかつて、「昔アシヨカ王はカリンガ國を攻めたとき、多くの死傷者を出して、戦争の悲惨なことを痛感して佛教に歸依した。それから、王は武器に代えるに、佛陀の教法すなわち智慧と慈悲とを以てし、單に印度のみならず、近隣の諸國にまで、平和と眞理の使節を派遣した。……我々が獨立した印度の國旗にアシヨカ・チャクラ(Asoka chakra)を用い、アシヨカ・ライオンを國の紋章としたのも決して偶然な思いつきではない。それはアシヨカ大王が政治の理想としたところのものを我々もまた理想として受け継いでいるからである。それは平和と眞理としたところのものを我々もまた理想として受け継いでいるからである。それこそ平和と眞理とに對する印度人の眞摯な念願とたえざる努力とを象徴するものである。印度は今や我々の偉大な祖先によつて示された道を踏もうとしている。そして、我々は世界を戦争の慘事から救うために、あらゆる努力を捧げている。まさに武器による勝利が決して長く續くもの

でないことを忘れてしまつてゐる現代において、今日ほど佛陀の教が強く要望されている時はない」といつてゐる。世界の歴史において干戈に訴えることなく、正義感と信念とを以て獨立し得たのはただ印度のみである。ネール首相は平和五原則の根柢に五戒 (Pancha Sila) を置いていることは意味深い。我々は各人の生命をあくまで尊重し人格價値を愛敬し、他の所有權をどこまでも優先し、性道德を守つて男女は身心淨潔であり、眞實語や愛語を用いて、他を裏切ることなく、徹底的に義務を果し、自己の責任を重んじ、懈怠の根源たる酒類を飲用しないことは現に印度においても遵守されつつある。現代の道德も正義感と敬愛とを根基とし、パンチャシラを實行するならば、やがて力の觀念を抜き去り、個人及び國家より、我執我欲を除き、相互に扶助し協力し合い、イデオロギーの對立を超克して中道精神を實踐し、世界に兵戈無用の平和な樂土を建設し得るであらう。科學を包む宗教的睿智と萬人を包容する慈悲の心とを擴大強化するならば、海外識者のいう「彌勒への道」も現代に具體化し得ると信ずる。されば、道元禪師は正法眼藏辨道語で「國家に眞實の佛法弘通すれば、諸佛諸天ひまなく衛護するがゆえに王化太平なり。聖化太平なれば、佛法その力を得るなり」といわれる。眞實の佛法が世に弘通すれば世界は自ずから太平となり、聖化太平となれば、佛法もまた力を得るであらう。佛法はあく

までも主體的に人間を動かして、その本領を發揮せしめ、人類に平和と福祉とを將來せしむべきである。

繰返してゐるならば、要するに、

(1) 佛教は眞理の認識に暗き無明をを斥けて、宗教的睿智たる智慧を體得し、その智慧は科學的知識を内に包みつつ、現代科學の誤れる方向すなわち人類の滅亡を齎らす核兵器の使用を互いに禁止せしめ、(2) 佛教は空無我の思想を説いて、あらゆるとらわれ、こだわり、はからいを否定し、個人我や國家の跳梁を抑制し、(3) 佛教は緣起相依の信念に徹し、個人や社會の相資共生を強調し、相互の理解と扶助とを促進し、(4) 佛教は中道思想を以て極端な二元的對立觀を超克し、オロギーの拮抗を解除し、且つ高次に昇華せしめ、(5) 佛教は佛性思想に基いて、人間の悉く佛子たることを認め、人間としての主體性を確立し、人格の尊嚴性を肯定し、互いに深い理解と敬愛の念を持ち、(6) 佛教は大乗菩薩の誓願を重んじ、利他の行願に生き、大智の故に住まらず、大悲の故に悟界に住らざる無住處涅槃を本領とし、(7) 佛教は出家在家の別なく、五戒を以て、日常生活を律する掟おきてとし、不殺生戒を以てあくまで人間を含めてすべての生命を尊重し、(8) 佛教は正法に基いて、秩序ある僧伽すなわち理想社會を形成して、和合衆の實を挙げ、東洋的デモクラシーを以て、その組織を強化し、自由にして平等な人間の理想を地上に實現し、(9) 佛教は

政治の理想像を轉輪聖王とし、普遍的な法によつて世界を平和裡に統一し、アショーク王の愛の精神、聖徳太子の和の精神をその具體的範型とし、(10)佛教は矛盾を含む人間性に立脚して超越的宗教と内在的宗教の二つの類型を出し、一は現實の自己を反省して罪業深重なるを痛感して絶對者を外に認め、これに絶對歸投し、他は人間の尊嚴性にめざめて絶對者を内に認めて、これに成り切ろうと精進し、一は本願の信に生き、他は本證の信に生きて、共に兵戈無用・聖化太平の平和な樂土を地上に實現せんとする平和愛好の宗教であることをここに明かにするものである。

勿論これは單なる理念にあらずして、必らず實現性を持つ理想でなければならぬ。佛教徒はかかる理想を掲げて世界的に團結し、佛教人口を組織化して、強力に平和運動を展開すべきである。自ら實行せずして他に實行せざるは佛教徒の通弊である。それは家庭の如き小範圍から始めるもよいであらう。

〔附説〕ケネディ米大統領が兇彈に斃れ、その後を承けたジョンソン大統領が國會で行なつた演説の原文は十一月二十九日のジャパンタイムズに掲載された。新大統領は「この時代におきて平和に敗者はあり得ず、戦争に勝者はあり難し」(In this age, there can be no losers in peace no victors in war.)と絶叫した。これは嘗に米國のみでなく世界の人々によつて銘記されるべきであらう。

新刊紹介(7)

宇井伯壽「大乘佛典の研究」

第一部 金剛般若經和譯

金剛經の梵本、漢譯、其の他

摧破具としての金剛石

第二部 金剛般若經釋論研究

第三部 雜錄

一 彌勒菩薩と彌勒論師

二 莊嚴經論並びに中邊論の著者問題

三 六門教授習定論―國譯並びに註記―

四 成唯識寶生論研究

五 菩薩、佛の音譯について

七 鳩摩羅什法師大義

七 佛國記に存する音譯語の字音

ADVAYAVAJRA TATTVARATNAVALI

A 5 本文 一〇三七頁
岩波書店刊 定價 五、〇〇〇圓